ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第49号　2019年1月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　日本の宗教教育のあり方について	雨宮　和輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（49） ―下関の芸妓小梅が日本最初のファーストレディになる―	神辺　靖光	6
学都金沢での金沢高等工業学校の位置付け ―『全国上級学校大観』（1938 年 11 月）の記述から―	谷本　宗生	11
教育史研究の周辺⑧ 学校を経由した社会移動研究（地理移動編④）	加藤　善子	14
河合榮治郎の「女性の教養」観⑧	末松　亜紀	17
明治後期に興った女子の専門学校（4）　明治女学校の変化	長本　裕子	20
カレッジノベルの研究への道（1） ：なぜカレッジノベルを扱うのか	吉野　剛弘	24
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（16） ―明治大学史資料センター―	田中　智子	27
「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で 「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（2）	冨岡　勝	32
我流・文献紹介(10)　―東京都の私立高等学校―	神辺　靖光	36
刊行要項（2015年6月15日現在）		40
短評・文献紹介		41
会員消息		42

コラム
日本の宗教教育のあり方について

雨宮（あめみや）　和輝（かずき）
（早稲田大学）

筆者はこれまでニューズレターにおいて、大正期の宗教系私学の大学昇格の実態に焦点を当てた記事を執筆してきた。その中で注目してきたのは大学昇格前後の大学の教育方針の変化や、学部・学科課程の変化であった。ただ、これまでの執筆内容は、宗教系私学における教育内容や方針の変化に焦点を当てたもので、宗教がどのように教育の中で活用されてきたのかには言及してこなかった。そこで、本コラムでは、日本の宗教教育のあり方とはどのようなものであったのかを述べたい。

まず、宗教教育には大きく分けて二つの定義がある。一方は特定の宗派の聖職者養成や教義の伝授などを目的とした宗派教育、一方は特定の宗派については教授しない宗教知識教育及び宗教的情操教育である[1]。筆者がこれまで取り扱ってきた明治・大正期の宗教系私学で主に行われていた宗教教育は宗派教育の方であり、特に僧侶養成特化の仏教系私学での教育は宗派教育そのものだった。また、キリスト教系私学では日曜学校における教育が宗派教育に該当する。海老澤亮は、1900年代に入って行われるようになった日曜学校事業に関して「日曜学校事業は、教会にとって重要なるものである事を痛感するに従って、各派教会の本部には自然教育局又は教育部が設けられ、又発展して来つて、追々協会本部と同様の事業をその教派内部に於て行ふやうになつた、教師養成の事や、講習会、又文学出版の事など、如何にその間に協力体制が量らるべきかは、恐らく今後の問題であらう」[2]として、日曜学校がキリスト教系私学の宗教教育の中心的な部分であり、それをもとにして学校が発展してきたと述べている。このように、明治・大正期において宗教教育とは、宗教系私学において行われる宗派教育であり、限定され

た教育の場で行われる教育だったことがわかる。

しかし、昭和期に入ると、宗教系私学以外の教育の場においても宗教教育が必要であると、宗教系私学関係者が主張するようになる。例えば、駒澤大学学長の忽滑谷快天は『教育時論』において教育現場における理想的な宗教教育には以下の4つの要素が必要であると述べている。

第一　学校教育に採用せらるべき宗教は現代の学術と矛盾する信条を有すべからず。

第二　学校教育に採用せらるべき宗教は形式に随せざるを要す。

第三　学校教育に採用せらるべき宗教は普通道徳に違背する信条を有すべからず。

第四　学校教育に採用せらるべき宗教は実際生活の価値を否定すべからず[3]

以上の要素を含んだ宗教教育こそ、教育の現場にふさわしいと述べており、忽滑谷はそれに該当するものが禅であるとしている。曹洞宗を母体とする駒澤大学の学長であるからそのように論じるのは当然ではあるが、第二の要素に関して忽滑谷は「一箇所宗派の形式によって宗教思想を培養せんと欲せば、勢ひ他宗派の形式に慣れたる学生生徒の反感を挑発すべし」[4]として、特定の宗派を押し付けるような宗教教育は好ましくないと述べている。また、第三の要素で述べているように、宗教的価値観が教育の場での道徳的価値観を侵してはならないと指摘している。さらに、忽滑谷は「果たして然れば学校教育に宗教の本質を採用して、知的教育の欠点を補ひ、学術によって宗教的情操を破壊せずして、却つて之を濃厚ならしむるやうにつとめ、学問愈盛にして、信仰の内容、いよいよ無限に豊富にするやうにしたいものである」[5]として、教育と宗教の利点を互いに高め合うべきとしている。僧侶養成特化の宗派教育を行っていた仏教系私学関係者が、非宗教的な学校現場においても宗

教教育を実現し、その際には宗教教育は、教育の現場に合った形で行われるべきと主張していたのである。

このように戦前において公教育の現場でも宗教教育を行うべきとする言説が存在していた。そして、戦後、占領下でも日本の教育において宗教の存在が必要であると認識されていた。『米国教育使節団報告書』の序論を見ると、民主主義的な国家へと日本を導くという目的のために「日本にある各種の宗教はよいものである限り役立って来たし、今後も続いて役立つであろう」[6]として、宗教が民主主義思想国家の建設に役立つと述べている。さらに「宗教的な思想とそれを自由に実施できるようになったので、今や日本人は、かれらのもつ数種の宗教を批判して、かれらの文化に最高の意味を与えるようになった形式の宗教を、採用できるようになるであろう」[7]という部分では、日本が民主主義国家になるために宗教が大きな影響を与えると捉えていたことがわかる。このように戦前、戦後を通して教育の場で宗教教育は禁止されてはいなかった。しかし、憲法及び教育基本法によって公教育の場において宗教教育の実施が許されなくなったために、日本において宗教教育は、主に私立学校において行われる限定的な教育になったのである。

では、現代の宗教教育はどのような形で行われているのか。キリスト教系私学の事例を見ると、礼拝を教育の中で行うことに関して倉松功は「善悪の価値、未知なこと、まだ知らない、非経験なこと、超越者なる神、キリストに出会う礼拝」[8]を学生に体験させるためにあるものとしている。また、土屋至は「宗教的な教義を教えることではなくて、それぞれが、生き方をその中から学んで欲しい」[9]といったスタンスでキリスト教的宗教教育が行われていると述べている。現在のキリスト教系私学で行われる宗教教育は、教義を教えるということを重要視しているのではなく、キリスト教の考え方から生徒、学生に対して生き方を学ばせるようにする教育であることがわかる。

以上のように、本コラムでは日本における宗教教育のあり方を論じてきた。現在において宗教教育は主に私立学校においてのみ実施され、しかも、そこ

で行われる宗教教育も、教義を教授するものではなく、宗教を通して人間形成を行うことを狙いとしたものである。戦前から現在までに至る宗教教育に関する議論や、教育現場における位置付けを踏まえると、宗教教育は、現在においても生徒の人間形成及び道徳的価値観の養成に貢献する教育方法として、私立学校だけでなく、公教育の現場でも活用することができるものではないだろうかと考えるのである。

注

[1]日本宗教学会「宗教と教育に関する委員会」編『宗教教育の理論と実際』(1985年、鈴木出版)12頁。

[2]海老澤亮『宗教教育の歴史的開展』(1933年、文書堂)130頁。

[3]「教育に採用せらるべき宗教」『教育時論』(1929年1月5日、開発社、1568号)4-6頁。

[4]「教育に採用せらるべき宗教」『教育時論』(1929年1月5日、開発社、1568号)5-6頁。

[5]「宗教・教育相関論」『教育時論』(1929年5月25日、開発社、1582号)7頁。

[6]「一九四六年三月三十一日　米国教育使節団報告書」『米国教育使節団報告書　全』(1959年、文部省調査局)4頁。

[7]「一九四六年三月三十一日　米国教育使節団報告書」『米国教育使節団報告書　全』(1959年、文部省調査局)4頁。

[8]倉松功『私学としてのキリスト教大学　教育の祝福と改革』(2004年、聖学院大学出版会)28頁。

[9]国際宗教研究所編『教育のなかの宗教』(1998年、新書館)39頁。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（49）

―下関の芸妓小梅が日本最初のファーストレディになる―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

図Ａ　明治 22 年 2 月 11 日　憲法発布の日
東京上野をねり歩く仮装した芸妓の群

図Ａをみられたい。明治22年2月11日の憲法発布の日、東京上野の公園に集った芸者の一群である。それぞれ思い思いの仮装をしてねって行った。医科大学の御雇教師ベルツは“今日ほどたくさんの美しい娘を見たことがない。一番きれいだったのは職人に仮装した一団だ”と感想を漏らしたという。宮中正殿でおごそかに憲法発布の式典が行われているその時、東京の市中では市民や学生が街路を練り歩いて万歳を唱えていたが、芸者の一群も仮装を凝らして遊歩していたのである。

そもそも芸者は表を練り歩く者ではなく、料亭などで宴席に侍（はべ）って男性に酌をしたり芸を披露したりする芸人であった。よって旧時代は群れをなして外出することはなかったのである。新時代になるとそれが少しずつ変った。明治10年に大阪府は各地に女子手芸学校をつくったのだが、その開業式に大阪新町の芸妓舞子が渡辺昇府知事の到着を出迎えたと2月15日の「朝野新聞」が伝えている。大阪

の女子手芸学校は一般の女子ばかりでなく花柳界の女紅場まで加えたからそうなったのかもしれない。その日、朝から開業式が行われる学校から戒橋(えびすばし)まで道の両側に紅燈を釣り、芸妓の名を書いた大提灯を掲げたというからただごとではない。空前のことであったろう。「朝野新聞」も“まさか東京ではありますまい”とことわっている。その“まさか”が12年後の東京上野の公園で芸妓総出の仮装行列になったのである。

要するに旧来、お座敷や料亭の中だけで咲いた芸妓が街路にくり出すようになったのである。その物に怖じない度胸が培われ、そうした風潮が20年間に醸成されたのである。

本シリーズ29号に書いたことだが、「芸者」「芸妓」をふり返ってみよう。芸者も芸妓も本来は座敷で踊りや音曲をする芸人で封間太鼓持(ほうかんたいこもち)を指したが、次第に女芸者を芸妓(げいぎ)と呼ぶようになった。遊郭のお座敷にも呼ばれて踊りを披露するが娼妓ではない。郭内に閉ぢ込められているのではなく、置屋(おきや)と称する紹介所に籍を置く。名義上は置屋のおかみさんの養女ということになっているが、住いは別の場合もある。置屋を通じてお座敷がかかると出向いて唄や踊りをした。出自は貧乏人の娘で、置屋の目ききで合格すれば、前借金で置屋に預けられる。そこで芸妓としてのしつけをされ、一人前と見なされればお座敷にでる。給料は置屋にかなり取られるが、当人にも渡される。

芸妓に要求されるのは芸ばかりでなく気のきいた会話である。お座敷の客は年配の仕事にたけた男である。社会の善悪、機微をよく知っている。その仕事に疲れた身体を休め、楽しむためにやってくる。性欲のはけ口は娼妓遊女がやってくれる。芸妓は客の戯(ざ)れ事の中からその気を汲んで適切な言葉で返さなければならない。そのよう

に気が利(き)いて度胸がすわった芸妓がもてたのである。性欲を売り物にしないとは言ったが、そこは男女の中で意気相通じれば愛人となって第二夫人になることもあるし、また別れることもある。英米人が好む自由恋愛に似ている。唄や日本舞踊で鍛えられているから美貌で挙措動作が美しい。その上、会話が面白いとなれば男に大もてである。幕末に芸妓は増加し、特に商人が集る港町や商業都市で繁盛した。

幕末には西国諸藩の武士たちが尊皇攘夷を唱へて奔走した。彼らは従来の参勤交代のようにきまった道を往復するのではなく、藩領をまたぎ、船をつかって各地に出没した。人の集る港町は格好の密談邂逅場であった。ここで彼らは芸妓を呼んで遊ぶ。

下関稲荷町(しものせきいなり)に小梅という芸妓がいた。長州藩の足軽(あしがる)・伊藤俊輔はこの小梅と出会い、その利発に惚れて下関で同棲した。俊輔には妻がいたが、間もなく離婚して小梅と結婚した。俊輔はどんどん出世して明治18年には伯爵・総理大臣伊藤博文になった。芸妓小梅は伊藤伯爵夫人梅子となって鹿鳴館ではファーストレディとして振舞った。歌や書は下田歌子に習い、英語は津田梅子に学んで忽ち覚えてしまう才媛であった。ダンスも日本舞踊の素養があるから軽々とできたであろうし、人をそらさない口調と挙措動作は芸妓時代に鍛え抜かれている。こうして日本初のファーストレディが誕生したのである。

図B　内閣総理大臣
伊藤博文婦人梅子

明治の政治家の妻で芸妓あがりで有名なのは木戸孝允の妻松子（芸妓名・幾松）であるが、木戸が早く亡くなったので、芸妓時代の活躍は多く語られているが、参議夫人としては知られていない。そこで伊藤博文の同時代の政治家・陸奥宗光夫人りゅう子のことを書き添えよう。

りゅう子は東京新橋の芸妓小鈴であった。江戸の花柳町は隅田川に沿った浜町柳橋にある。そこには料亭や芸妓の置屋が密集し、下町大店の大旦那衆が遊びに来ていた。明治になると柳橋の向こうを張って築地に新橋という花柳町をつくった。外国人居留地にも内桜田、外桜田の官庁街にも近いので政治家や官僚を対手にしようとしたのである。しかし外国人の商人は横浜に根を据えて、お固い宗教家や教育者が築地に集ったので新橋は日本の高級官僚の遊び場になったのである。

後に外務大臣になって日清戦争前後の外交政治に手腕を振った陸奥宗光（旧和歌山藩士）は明治元年、外務事務局御用掛に就任以来、政府の各職を転々としたが、その間東京に来るたびに新橋で芸妓小鈴と邂逅した。小鈴の美貌と才気に惚れ込んだ陸奥は小鈴を落籍し結婚した。明治25年、陸奥は第2次伊藤内閣の外務大臣に就任した。以後、陸奥は外交官として各国に赴く。結婚した陸奥りゅう子は一心に外国語を学んで各国語に通じた。そして持前の美貌と才気

図C　外務大臣陸奥宗光夫人　りゅう子

で振舞ったので各国の社交界でもてはやされたが、特に駐米公使時代はワシントン社交界の花形として陸奥をたすけたといわれている。

古代以来、日本では天皇の直下につく臣は太政大臣と左大臣、右大臣であり、この三大臣は必ず藤原氏の家系の中から選ばれた。そして、その妃も必ず藤原氏に連なる娘でなければならなかった。明治18年の内閣制は無能な公家を政府から遠ざけるために断行されたのだが、天皇に直結する内閣総理大臣以下の各大臣は旧武家の中でも下級武士から選ばれている。そしてその夫人たちも公家の姫はいない。旧時代、一般庶民の中でも低く見られていた芸妓がその美貌と才気を挺子に一躍、大臣夫人に躍り上がったのは明治維新の痛快事であろう。

参考文献『画報近代百年史第5集』

学都金沢での金沢高等工業学校の位置付け
―『全国上級学校大観』(1938年11月)の記述から―

谷本(たにもと)　宗生(むねお)(大東文化大学)

今号では、レター40号で第四高等学校を取り上げたので、金沢高等工業学校(1920年創立)について『全国上級学校大観』(1938年11月、433～438頁)の記述から、以下のとおり少し紹介したいと思う。

****　　****　　****　　****

【[金沢高等工業学校]沿革略】

大正七年三月四日　第十一高等工業学校の敷地を石川県石川郡崎浦村に決定せらる。

大正七年九月七日　名古屋高等工業学校教授青戸信賢氏金沢高等工業学校創立事務を嘱託せらる。

大正九年十二月二十七日　名古屋高等工業学校教授従五位勲六等青戸信賢氏校長に任命せらる。

****　　****　　****　　****

金沢は前田侯の城下町だつた。百万石の大々名の城下町として、偉容を天下に誇つたものであるが、現在でも学校街としての誇りが十分あると思ふ。先づ街の勇者四高を始めとして、此所に語らうとする金沢高工、医科大学及び医大附属薬専等があるのだ。四高だけは金沢城下、中[学校]、女学校の直ぐ側にあるが、本校は街の中心をずーつと離れて市外崎浦村といへば以前の地名だが、今は市に編入されて上野本町といふところにある。大学前から高工まではバスが通じている。バスで約十分はかかるだらう。随分遠いところに学校を建てたものだが、然し学校の環境は断然よろしい。芝生のある正門前は、両側に樅の並木があつて、遠くの方に校舎が美しく輝

いていると言ふ風景である。創立は大正九年で第十一高等工業学校として創立費七十二万円を以つて出来たものである。当時名古屋高等工業学校の教授だつた青戸氏が創立事務嘱託を命ぜられ、大正九年に校長となり現在に至つている。一校一校長で創設以来続いているのも珍しい。それだけに学校はすつかり青戸流に定着して思想問題が起らうと何が起らうとビクともしない。非常に健実で、平和で一家団欒の楽しさがある。人に言はせると一人の校長が十何年も続くと校内の空気が沈滞していけないと言ふが、それは徒らに新しきを追ひ求める輩である。校長さんの更るたびに方針や人事がゴタついては教授も生徒もやり切れない。その点金沢高工は恵まれているといふべきだ。金沢高工には寄宿舎はないが、下宿料は安い土地である。この附近のお百姓さんの家にでも下宿すれば月二十円程度で大名扱ひだらう。学都金沢には、なる程三つの高専があるが、中でも金工生は「俺達は紳士だからね」と、若きエンヂニヤーとしての誇りを抱いて只管学業に、実習に励んでいる。戦時下の軍需景気はこの紫錦ケ丘上にも押寄せ、一と頃少し振はなかつた金工の就職も今は全く昔日の夢と化し、華々しく工業界の前面に押出されている。

**** **** **** ****

青戸校長は曾てかう語つた。「本校では堅実にして雄大なる校風の下に、人格第一主義で教育することを目的としています。これは寧ろ人間を作るためには当然のことです。[入学]採用に際しては中学時代の成績は相当重視します。浪人も決して敬遠せず、今年などは半分はその前年迄に卒業した人で占めている程で、二十八歳が一年生の最高年齢です。然し元来、何度も受験に失敗した人は、入学後も他の学生にいい影響を与へません。試験場は本校だけですが、之も他の高工に比して志願者の少い原因になりませうね。丁度三月は此の地方はまだ雪があつたり交通が非常に不便ですからなるべく他の学校へ志願すると言ふ人が多いやうです。試験場を各地に設けるとそりやあ志願者が二三割は増加するでせうが、志願者の

多いことを誇るのは大きな間違ひですよ。口頭試問もありますがこれは詳しくはやりません。人物考査のみで不合格になる人は今年など一人もなかつたと思ひます。大切なのは試験科目です。数学は満点が相当にある程ですから、満点位はとらなければ機械科は望みはありますまい。」と。

****　　****　　****　　****

【校内記事】

校友会はかなり活躍している。校友会の部の中で特に目立つている部は馬術部、排球部、射撃部、野球部であらう。排球部は北陸にはもはや敵はなく、全日本の試合には出場している。射撃部は[昭和]十二年度東京で行はれた第一回全日本学生射撃大会に第二位の良成績を得ている。高工は第九師団の射撃場のすぐ側にあるので射撃の練習に好都合なのである。なほ、ここでは昭和十二年にグライダークラブ（航空研究会）が結成され、航空日本にふさはしい活躍をつづけている。同会役員の顔触れは次の通りである。（但し評議員、幹事名略）　会長　金沢高等工業学校長　青戸信賢　顧問　金沢高工教授　田淵京次郎　[同上]　帝国飛行協会石川地方本部次長　山口乾治　[同上]　第九師団司令部附　牧次郎　[同上]　金沢市長　澤野外茂次　なほ又昭和十年原因不明の火事によつて焼失した機械科工場は十二年度既に立派に出来上つている。

****　　****　　****　　****

金沢高等工業学校（土木工学科・機械工学科・応用化学科）のなかでも、とくに機械工学科では、実習に重きを置く田淵京次郎学科長の指導方針により、仕上工場勤務に必要な機械技術の操作を実地指導するなどしている。

教育史研究の周辺⑧

学校を経由した社会移動研究（地理移動編④）

加藤（かとう）　善子（よしこ）（信州大学）

フィールドとしての東京

東京への流入を、就労と就学の両面から包括的に捉えたのが、佐藤(粒来)（2004）『社会移動の歴史社会学―生業／職業／学校―』である。地理移動を、就学の有無だけでなく、出身地域や出生順位、そして出身階層によって分析した研究で、教育社会学の領域をはるかに超えて、労働経済学や農村・都市社会学の文脈にまで広げて分析した大著で、読み直す度に新しい発見がある。今回は東京への就労・就学移動に注目する（次回は産業構造の変化による職業移動などにも触れていく）。

東京は、その人口増加率が全国に比して非常に高く、自然増加をはるかに上回る規模で社会増加が進んだ。1890年には123万人であった東京23区の人口は、1920年には335万人、1930年には499万人、1940年には678万人になる。全国の人口は1890年に3990万人であったものが、1920年に5596万人、1930年に6445万人、1940年は7193万人になっている。5年ごとの増加率を見ると、東京ではコンスタントに20％前後であり、全国では6～8％である（ただし、1935年から1940年の増加率はどちらも3％ほど下がっている）[1]。

就学移動と就労移動

この分析のために佐藤(粒来)は、SSM全国調査のうち1965年調査と、1960年東京SSM調査のデータを使用している[2]。この60

年データでは、流入者が213人で東京生まれが115人であり、全体328人中、流入者は実に65%を占める。流入者の中での就学移動は54人（25.4%）、就労移動は159人（74.6%）であるが、就学移動者ではその65%が高等学歴を、24%が中等学歴を取得している一方で、就労移動者では72%が尋常小学校または高等小学校程度で、高等学歴を取得しているものは10%にとどまる[3]。

就学移動者は、その41%が初職で管理職に就いており、70%が専門官吏または100人以上規模の雇用ホワイト職に就く。就労移動者は、16%が初職で管理職に就き、農業を除いて39%が100人未満の雇用ブルー職、18%が同規模の雇用ホワイト職に就いている[4]。

東京出身者の進学観

一方、東京生まれは、高等学歴を取得しているのは11.3%、中等学歴取得者は34.8%、尋常小学校または高等小学校の者は52.2%である。統計的には出身地と学歴との間に有意な関連性はないようだが、流入者の人数が多いこともあって、東京における高等学歴取得者の65%は、流入者が占めることになった[5]。

ここで興味深いのは、東京生まれが必ずしも進学を求めていなかったことである。佐藤(粒来)は、1900年前後の東京では、「近代的」とされる工場労働者よりも「前近代的」な職人の方がむしろ安定しており、経済的にも優位にあったとする江波戸の研究を引用し、1910年に出版された『浅草繁盛記』でも、官吏・学者・政治家などの「ハイカラ流の徒」はみな地方人の立身したもので、学問や財産や手腕はあっても、趣味が洗練されていないと見下す記述があるという。この、江戸からの職人や商人がつくる「生業の世界」は、学校を経由して入る「職業の世界」に比べて経済的に豊かで、文化的に

も優位にあり、ここで高学歴は必要とされなかった。進学するよりも早く職に就いて生業を継ぐことは、規範だけでなく経済的合理でもあったのだ[6]。

しかし、戦間期に入り重化学工業が発展すると、この世界は淘汰されるか周辺化される。ここで学歴の重要性が認識され、学歴を介した職業移動が始まるとともに、自営層の解体が始まる。下町と山の手は、豊かな「生業の世界」と「職業の世界」という緊張した関係から、貧しい下町と豊かな山の手という階層関係に変化していく[7]。

東京の中学校への進学は地方出身者に席巻されており、それが一段落した明治40年頃から東京出身者がようやく進学するようになるという現象と、東京の産業構造と生活が転換していく様子を照らし合わせると、農村・都会という軸と、前近代・近代という軸が交差したところに、人の移動のダイナミズムが浮かびあがる。東京以外の大都市の研究が必要であることを強く思う。

注

---

1 佐藤(粒来)香（2004）『社会移動の歴史社会学―生業／職業／学校―』東洋館出版社, p.92.

2 前掲書, p.56.

3 前掲書, p.96.

4 前掲書, p.97.

5 前掲書, pp.102-103.

6 前掲書, pp.99-100.

7 前掲書, pp.100-101.

河合榮治郎の「女性の教養」観⑧

末松（すえまつ）　亜紀（あき）（聖心女子大学）

先月号では、1937(昭和12)年4月号の『婦人の友』にて河合が発表した「学窓を出ずる女性に与う」を取り上げ、河合は教養を男性の独占物とは考えておらず、女性にも高い知性や人格形成への可能性を認めていることを述べた。ここでも引き続き同論文を取り上げ、河合の女性に対する教養観に注目していく。

河合はこれから学窓を出る女性たちが何をすべきかについて、以下のように論じている。

> 先ず御勧めしたいことは、読書と云うことです。（中略）書物の中で伝記、随筆、小説、戯曲から哲学、歴史まで挙げれば遑がありませんが、比較的今まで女性に縁遠かったものではありますが、政治、経済、社会に関するものが、あなた方の視野を広くするに役立ちましょう。殊に私の御勧めしたいのは、社会思想史に関するものです、之は今までの社会思想家の辿り来たれる思想の変遷を叙述したものとして、あなた方の指導原理を把握するのに必ず役に立つことと思います。[1]

このように、河合は幅広い読書を推奨しているが、その中でも特に政治、経済、社会、とりわけ社会思想史の学問分野を強調していることは、大きく注目できる。

河合は旧制高等学校に通う男子生徒たちに対しては、客観的な事象よりも主観的な問題である人生観の構築に専念するために、経済学、政治学、法律学などの社会科学の書物を読むことは大学まで

保留すべきであると述べている。[2]高等学校生が、社会科学の根本思想を理解しないまま社会科学について語ることを「滑稽であるのみならず時間の浪費である」[3]と厳しく批判している。

さて、「学窓を出ずる女性に与う」は高等女学校だけでなく女子専門学校を卒業する女性も対象にしている。女子専門学校は、入学年齢と修学年限の二点において、男性でいうところの高等学校に匹敵する学校段階であろう。よって男子生徒たちが高等学校を卒業して大学に入ってから読み始める社会科学系の読書を、女子専門学校を卒業する女性たちに推奨するのは頷ける。このように河合は教養の対象を男性だけに限定せず、女性も含めていただけではなく、女性にも同様に幅広い学問分野の読書や社会科学系の読書も推奨していたのだった。

しかし両者の教養観の違いは、教養の「結果」、つまり教養の果たす役割にあると考えられる。河合は教養の結果として社会変革を目指しているが、それは男性だけに求められるもので、その点は女性を視野に入れていないだろう。河合は同論文に、直接的な社会変革への期待を述べていないばかりでなく、以下のような言葉で締めくくっている。

> いかなることがあろうとも、強くそして純潔な素直な、聡明な婦人となって戴きたいと思います。優れた婦人ほど社会にとって必要なものはありません、何故なれば婦人は子供に対して常に師であり、而も人生の初期に於て決定的の影響を持つ師であるのですから。[4]

このように、女性の教養を発揮し活躍する場は、一般的には家庭の中であり、優れた母親として子どもを育てることにより、間接的に社会改革に携わるということを想定していたのではないだろうか。

[1]河合榮治郎 1937「学窓を出ずる女性に与う」『婦人の友』 婦人の友社，1937『第二学生生活』所収 日本評論社（社会思想研究会編 1968『河合榮治郎全集』第17巻所収 社会思想社，144頁）

[2]河合榮治郎 1935「高等学校時代の読書」『第一学生生活』日本評論社（社会思想研究会編 1968『河合榮治郎全集』第16巻所収 社会思想社，165頁）

[3]河合榮治郎 1935 同上書「高等学校時代の読書」（社会思想研究会編 1968『河合榮治郎全集』第16巻所収 社会思想社，165頁）

[4]河合榮治郎 1937 前掲 「学窓を出ずる女性に与う」（社会思想研究会編 1968『河合榮治郎全集』第17巻所収 社会思想社，147頁）

明治後期に興った女子の専門学校（4）
明治女学校の変化

長本（ながもと）　裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治政府の急激な欧化政策に乗じて、キリスト教系の女学校が各地で開校され、明治18年までに23校、20年には40校に及んだ。

条約改正が目的だったとはいえ、鹿鳴館で連夜派手な舞踏会が催される風潮は反動の波を起こした。21年ごろから台頭してきた国粋主義は、欧化主義に警告を鳴らし、日本人本来の文化や歴史を学ぶことを主張した。22年2月11日大日本帝国憲法発布式典の日、森有礼文部大臣が、国粋主義者西野文太郎に刺殺された。20年の「伊勢神宮不敬事件」が原因という。18年に文部大臣に就任し、「国家富強の根本は教育にあり」「教育の根本は女子教育にあり」として、「賢良なる慈母」となるための女子教育の必要性を説いてきた森大臣の死が、女学校に思わぬ波紋を広げた。

明治女学校は、近代的婦人教育を掲げて、いち早く「高等科」の設置や自由科目設定などの特色を示した。しかし、政府の方針や世相によって少しずつ姿を変えていく。

23年の夏、九段坂上から麹町区下六番町に移転した。予科生の授業時間は1日4時間。本科生は共通学科3時間と、別に家政科と専修科の2時間が置かれ、1日5時間とした。家政科は裁縫・料理、その他家政一般。専修科は英学・国文・音楽・画学・裁縫・女礼・速記・師範の科目が学べた。予科2年を終えて本科に進み、家政科を学ぶと、卒業後すぐに家庭婦人になっても役立ち、専修科は一芸を身につけられるので、本科卒業の後、独立自活することができるというように進路の多様性をはかった。18年の開校時にはなかった裁縫・料理・女礼など家政科の科目が導入されたのである。

当時は一般的に「良妻賢母」教育の志向が強かった。もともと巌本善治の婦人に対する考え方には「男女異質論」があった。婦人は子供を産み、母となるというところに男性とは違う本質があると考えていた。また、開校時には新時代の女性にふさわしい知性の向上と教養の獲得を第一の目的としていた。「独立自活できる女性」を目指すのは当然である。これらを選択できるようにして他の女学校との違いをはかったといえよう。

森大臣の死後、女子教育批判の風潮が高まり、森大臣の下で教育政策を進めてきた東京高等女学校校長の矢田部良吉が矢面に立たされた。森大臣が倒れた2ケ月後の22年4月～5月にかけて、矢田部とその妻の順を連想させる人物が登場する小説「濁世」が、須藤南翠によって『改進新聞』に連載された。これをきっかけに女学生の醜聞をさまざまな新聞が書きたてた。矢田部は改進新聞を相手に訴訟を起こしたくらいだ。その後、改進新聞から「謝状」が届いたので訴訟は取り下げた。しかし、東京高等女学校は23年3月をもって廃校になった。

これは他の女学校にも影響が及び、特にキリスト教系の女学校の生徒が半減していく。明治11年、澤山保羅によって創立された梅花女学校（大阪府）では、23年4月から24年3月までに、退校生が80名に達したという。その半数は家事都合によるものであった。そして10月には教育勅語が発令された。

そうした世の中の動きを察知してか、24年になると、職業科、主計科、武道科などが置かれた。『国民新聞』（明治24年2月5日）は、「明治女学校は、女子職業部を増設し、すでに2、3科目は授業を始めているが、主計科をも2月20日から1期を5ケ月として開始する。卒業後は銀行、商店、新聞社その他諸会社の会計、簿記、書記等の

雇用に応じさせる、時勢に適ったおもしろい、女子の自営自活を推進する設置である」と評価している。

24年、薙刀科が置かれ、星野天知が教授した。田辺花圃（後の三宅花圃）が薙刀の授業を受けている。田辺は、明治女学校に一時籍を置いたことがあり、東京高等女学校専修科を卒業し、女学雑誌社の仕事をしていた。巌本は、それより2年前の22年に、体操の別科として「武道科」を設置し、天知を招き、希望者に学ばせた。天知は剣道、柔術、棒術、後には鎖鎌も教えた。

星野天知

『女学雑誌』323号（明治25年7月23日）に明治女学校第5回卒業式のことが掲載されている。同志社女学校出身の広瀬恒子、竹内梅子、榊なつ子の3名が「高等科」最初の卒業生である。この3名は武道科も卒業している。卒業式では、卒業証書の授与、巌本教頭の勧告、生徒総代の祝詞や卒業生総代の答詞に続いて、武道科を終えた卒業生と在校生5名による武道演習が披露された。満場静然とした中、ただ掛け声と投げられる音とが聞こえる柔術、一進一退、カチカチと相打ち、変化に富む薙刀術。この5名の中には、後に天知夫人となる松井まん子（在校生）や、島崎藤村が恋した佐藤輔子（卒業生）がいた。武徳を身に付けた5人の演技は、式場内に崇高な雰囲気を醸し出した。「武道科」は明治女学校の特色となって閉校まで続けられた。

この『女学雑誌』323号には、高等科3名、普通科27名の卒業生の名前、師範科3年修業生6名、撰課3名、武道科11名、琴4名、速記7名の名前が掲載されている。速記の中には、後に自由学園を創立する松岡もと子（後の羽仁もと子）の名前がある。

巌本は、キリスト教主義に立ち、新しい女子の徳育を主張することによって、在来の女学校と一線を画し、武道や国文など日本の伝統的なものも重視して、宣教師派女学校とも一線を画そうとした。巌本が理想とした女性像は木村鐙子であっただろう。鐙子は漢学も武道も身に着けた女傑であった。木村熊二を扶けて明治女学校の取締を務め、生徒とともに寄宿舎で生活し、犠牲献身の道を歩んだ慈母であった。こういう鐙子の存在があったからこそ明治女学校は軌道に乗ったといっても過言ではないだろう。開校からわずか1年弱で亡くなった鐙子の写真が、九段坂上時代も下六番町時代も講堂の正面に掛けられ、巣鴨時代も校長室に掛けてあったと、卒業生が校友会の報告書に記している。このことからも、巌本が鐙子に明治女学校生の理想像を描いていたことが自ずと知れよう。

巌本は、時代の変化を敏感に察知して、教育課程を変えていった。『女学雑誌』に思想を熱く語り、青年男女に広く愛読されて、明治女学校は全国の女子の憧れとなっていった。下六番町時代、巌本の周辺に、後に有名になった文学青年たちが集まった。天知、北村透谷、島崎藤村らは、明治女学校で教え、雑誌『女学雑誌』や『女学生』に関わり、やがて『文学界』でロマン主義文学の一時代を牽引していく。

参考文献

青山なを著『明治女学校の研究』
太田由佳・有賀暢迪著「矢田部良吉年譜稿」
『国民新聞』(『新聞集成明治編年史』収載)
『女学雑誌』
藤田美実著『明治女学校の世界』

カレッジノベルの研究への道（1）
:なぜカレッジノベルを扱うのか

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号からはカレッジノベル（College Novel）を対象として研究を進めていくことにする。

カレッジノベルとは何か。明確な定義があるわけでもないが、大学を舞台とした小説である。なお、アメリカではキャンパスノベルと称されることもあるというご教示をいただいたこともある。どちらの表現を使うべきかという問題もあるのだが、本連載ではひとまずカレッジノベルの語で統一しておくことにする。今号では、このようなものを取り上げることに至った経緯を中心に述べることにする。

カレッジノベルというものを考える契機となったのは、2011 年に開催された大学史研究会のシンポジウムである。「カレッジノベル―文学・小説からひも解く大学史―」と題されたそのシンポジウムの報告者の一人として、「文学・小説にみる日本の大学―夏目漱石・久米正雄を中心に―」と題して報告した。

そこでは、カレッジノベルに関する先行研究をごく簡単に整理し、夏目漱石の『三四郎』と『こゝろ』、久米正雄の『学生時代』に収録された「競漕」と「受験生の手記」を取り上げた上で、近代日本のカレッジノベルの特徴とカレッジノベル研究の可能性について言及した。これらの詳細は後の号で触れることにしたい。

シンポジウムの一報告である上に、報告の依頼を受けたのがセミナーの 2 か月前であったため、にわか仕込みの報告という面は否めない。かなり雑駁な内容だった上に、何とか形にするために、さまざ

まな点を盛り込んだ。しかし、それゆえに、短期間でさまざまなものに触れたことも事実である。それらの諸点をもう少し深めてみようというのが、今号からの連載の趣旨である。

では、カレッジノベルを検討することで何が見えるのか。カレッジノベルを通して、人々の大学へのまなざしを見ることができるということである。

たとえば、山崎豊子『白い巨塔』という小説がある。大学病院を舞台にした長編小説で、数度にわたり映像化された作品であり、医局制度の問題など医学界の腐敗を描いた社会派小説として知られている。小説の中では、主人公財前五郎の教授昇任をめぐる争いが描かれる。ポスト争いは大病院であれば多かれ少なかれ存在するだろうが、そこに医局というものが関わる以上、大学病院を舞台にしないと成立しない。

大学関係者の手になるものでもない限り、小説の執筆者は大学について通暁しているわけではない。小説を執筆するにあたっては、入念な取材や調査がなされるのが通例であるが、外から見た大学と、内から見た大学は同じでもない。それゆえに、誇張などの事実とは反する内容も含まれることになる。

学生を中心に描いた小説もある。作家が大学を経験しているのであれば、ある種の事実に基づいていることにはなる。しかし、過去は美化されるのが通例である。逆に忌まわしい過去ならば、実態以上に悪く回顧されることになるだろう。

このような点を考えれば、カレッジノベルで描かれる大学は、客観的な事実には程遠い。しかし、そうであればこそ意味がある。そこまで歪曲されたものが人々の支持を集めるのだとすれば、それこそが

人々の大学へのまなざしなのである。

『白い巨塔』が長きにわたって支持されるのは、実際にはそこまでひどいことはないだろうと思いつつも、「さもありなん」と思わせるものがあるからだろう。大学病院には患者や患者の親族として関係を持ったこともある読者もいるわけで、この小説が支持される背景には、大学病院、ひいては大学医学部に対するまなざしが存在しているのである。また、週刊誌などでは、大学の学長・総長などのポスト争いが記事になることがある。そのような事実も、読者の想像力に訴えるところもあるのだろうと思う。

事実としての大学の歴史というものが重要であることは言うまでもない。しかし、社会の中で大学という存在が成り立つには、周囲がその存在を認めるということも必要である。現代にあっては、法令によってその存在が認められており、またそこに通うことで得られる学歴というメリットがその存在を支えているのだろう。

しかし、大学のレゾンデートルがそのような機能的なものであればあるほど、大学に対する懐疑的な目線というものも存在することになる。そのような目線に立って大学を直接批判するもの一つの方法であるが、戯画化することで描写するというのも一つの方法である。カレッジノベルを探求することで、そのようなまなざしの存在を突き止められるかもしれない。そのようなことを考えつつ、カレッジノベルについて検討を進めていくことにしたい。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（16）
―明治大学史資料センター―

田中（たなか）　智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

今号では明治大学史資料センターを取り上げる。同センターは資料の収集・整理・保存、展示のみならず、研究活動も行う大学アーカイブズである。以下、その基本情報および所蔵資料について述べていく。

（1）基本情報

明治大学史資料センターは、明治大学駿河台キャンパス大学会館内にある。その沿革は 1962 年、将来の本格的な校史編纂に向けて、大学史資料の調査、収集・整理、保存の任にあたる「歴史編纂資料室」が広報課に設置されたことに始まる。同資料室は 1977 年、『明治大学百年史』の編纂が計画された際には、教員組織である歴史編纂専門委員会（後に百年史編纂委員会となる）と連携して編纂事業を行った。1986 年には事務機構改革に伴い、所管が総務部となり、名称も「歴史編纂事務室」と改められた。

1994 年、『明治大学百年史』編纂事業が終了すると、百年史編纂委員会の後を受けて設置された大学史料委員会は、校史編纂事業において収集した資料や情報の活用方法を検討した。その結果、それらの業務を取り扱う組織を設置する必要があるとの認識を打ち出し、それに向けての働きかけを開始した。これらの動きを経て、2003 年 4 月、大学史資料センターが発足したのである[1]。

同センターの事業は、明治大学史資料センター規程によると、

(1)校史の調査及び研究、(2)校史の編纂、(3)資料の収集,整理及び保存、(4)資料の展示、(5)展示場の管理・運営、(6)校史に関する情報の提供等、(7)出版物等の編集・刊行等である[2]。中でも特筆すべきものは、(1)および(7)である。

同センターでは研究活動を活発に行っており、現在、人権派弁護士研究会、アジア留学生研究会、昭和歌謡史研究会、創立者研究会、財界人研究会、文学者研究会、三木資料研究会の7つの研究会が開催されている[3]。これらの研究会には、所長・副所長・運営委員・研究調査員の任にあたる教員らが所属し、研究活動を行っている。自校史研究を行う大学アーカイブズは珍しくないが、ここまで多岐にわたって活発な研究活動を行っているのは、他に類を見ない。

これらの研究成果の公表のため、同センターでは出版物の編集・刊行も精力的に行っている。【写真1】に写っているのは研究叢書と

【写真1】大学史資料センター研究叢書

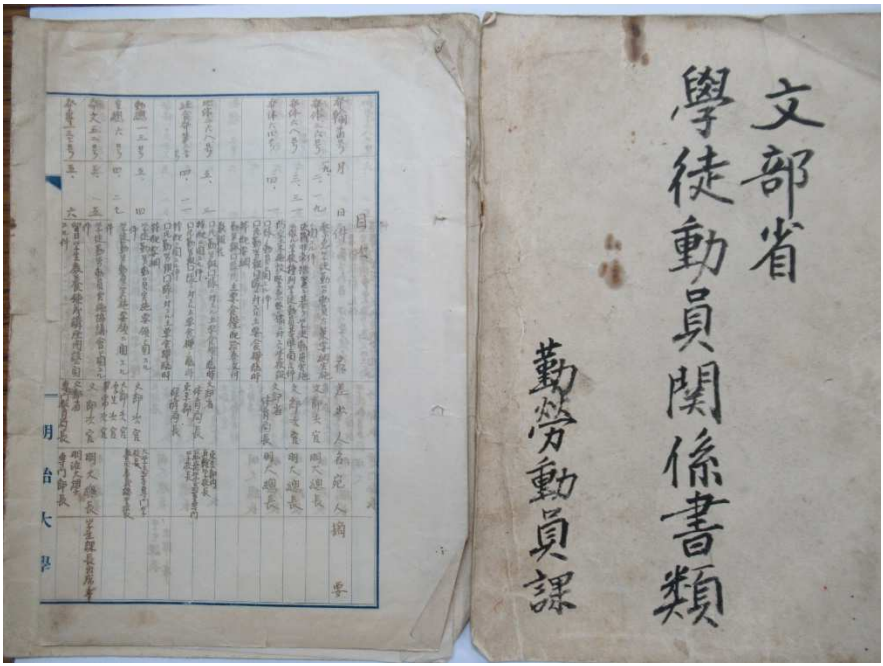
呼ばれるもので、同大学出身の著名人に関する研究書である。また、研究成果の活用として、自校史教育用の教材も刊行している【写真2】。

【写真2】自校史教材等

（2）資料紹介

同センター所蔵資料のうち、筆者が最も紹介したいのは、「学徒動員関係書類」である。これは戦時中、勤労動員課という部署と文部省との往復書類綴である。戦時中の学内文書群の中に学徒勤労

動員関係の書類が散見されるケースは多々あるが、それらが1冊にまとまって保存されているケースは稀である。



【写真３】勤労動員課「文部省学徒動員関係書類」

（3）資料へのアクセス方法

前掲資料のほか、明治大学史資料センターは大学史関係資料、同大学出身者関係資料等、様々な資料を有している。それらの資料を閲覧したい場合は、公開目録がないため、まずは電話等で所蔵を確認する必要がある。

開室日は基本的に、祝祭日、夏季・冬季休業日を除く月曜日から土曜日で、開館時間は月曜～金曜が10:00～16:00（11:30～12:30を除く）、土曜が9:30～11;30となっている。ただし、大学の

夏季休業期間中は開室日・時間が変更になるため、同センターホームページ（https://www.meiji.ac.jp/history/index.html）を確認していただきたい。

また、資料の出納に時間を要するため、資料を閲覧する際には事前に連絡を入れていただきたい。同センターの連絡先は下記の通りである。

電話：03-3296-4329・4085
FAX：03-3296-4086

（つづく）

1 明治大学史資料センターホームページ「沿革」（https://www.meiji.ac.jp/history/history/history.html）
2「明治大学史資料センター規程」第3条
3 明治大学史資料センターホームページ「事業内容」（https://www.meiji.ac.jp/history/business/about.html）

「教職課程コアカリキュラム」に準拠した教職科目で「カリキュラム・マネジメント」を教える試み（2）

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

第47号に続いて、筆者が勤務先で担当している授業の「教育課程・方法論A」に関連した記事を書きたい（将来、大学教職課程に関する一史料になることも願いつつ）。第47号の記事では、2018年に文部科学省が、教職科目について「教職課程コアカリキュラム」を定めたこと、2019年度入学生からの教職課程の新カリキュラムではこの「教職課程コアカリキュラム」の到達目標に準拠したシラバスによる授業が求められること、そのため筆者の担当する「教育課程・方法論A」では、新たに「カリキュラム・マネジメント」についても扱っていく必要が生じたことなどを述べてきた。

本号では、このように筆者の授業で扱うことになった「カリキュラム・マネジメント」とはどのようなことか、について説明してみたい。

カリキュラム・マネジメントとは何か

「カリキュラム・マネジメント」という用語[1]は、文部科学省関係の答申等では、2003年の中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」で初めて登場してから、約15年しか経っていない、かなり新しい用語である。2017年から出された一連の次期学習指導要領に登場して、教職教育に幅広く知られるようになった。例えば2017年3月31日「中学校学習指導要領」の総則では、次のように定義されている。

各学校においては,生徒や学校,地域の実態を適切に把握し,教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと,教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと,教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して,教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする[2]。

つまり、①授業計画の編成・評価・改善と、②人的物的な体制の確保を、全校規模で組織的に取り組んでいくことということになるだろう。なかでも各教員にとっては、①授業計画の編成・評価・改善について、全校の教員が意味のある意見交換をしながら協力的に実施していくことができるのかどうか、ということが問われていると考えられる。

こうしたことは、さほど目新しい考え方ではなさそうにも見えるが、次期学習指導要領で次のように示された「社会に開かれた教育課程」の実現のためのキーワードとなっている。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において,必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという,社会に開かれた教育課程の実現が重要となる[3]。

教職課程受講生にとっての「カリキュラム・マネジメント」

上記のことを、文部科学省などが出している資料を使って、授業の一部の時間を使って説明すること自体は、それほど難しくないかもしれない。しかし、文部科学省が「教職課程コアカリキュラム」のなかで到達目標として示している「学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性を理解している」ことを、教員としての経験がまだゼロである教職課程受講生が言葉の表面的な意味だけでなく、実感をもって考えるようにするためにはどうしたらよいのだろうか。

筆者の担当する「教育課程・方法論Ａ」は、１年次後期から履修可能な科目であるため、2年次以上の科目である各教科の教育法を受講していない1年生が受講生の大半を占めている。自分で模擬授業を実施した経験をまだ持たない1年生に、授業計画を全校規模で常に振り返り、評価・改善していくことの意義や重要性について実感をもって考えてもらうことは、一層困難であるだろう。

おそらくヒントは、「なすことによって学ぶ」にあるのではないだろうか。教職課程受講生が、授業づくりのやりがいや難しさを模擬授業の実施によって少しずつ学んでいくのと同じように、授業計画の評価・改善を自分たちの身近な問題として経験する機会があれば、「カリキュラム・マネジメント」について実感をもって考えていくことにつながるのかもしれない。

こうした理由から、筆者は大学が学生対象に実施している「授業評価アンケート」が活用できないだろうかと考えた。つまり、筆者が担当している「教育課程・方法論Ａ」の前年度データを今年度の受講生に示し、「〇：授業の目標が特に達成できている点、この授業の強み」と「△：課題となっている点、こ

の授業の弱み」を各学生が必ず○と△を2点ずつ出し合って話し合うという試みをおこなった。次回ではこの試みについて具体的に報告する。

（以下次号）

注

[1] この用語については、文部科学省に先駆けて村川雅弘、吉冨芳正、西岡加奈恵、田村知子などの研究者が、1999年ごろから「カリキュラムマネジメント」として使い始めている。村川らは、「カリキュラムマネジメント」の用語使用が文科省の「カリキュラム・マネジメント」よりも早かったというだけでなく、カリキュラムとマネジメントを結びつけることを重視する意味などから「カリキュラムマネジメント」語の使用を現在も続け、実践的な研究を蓄積している（例えば、田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡和奈恵編著『カリキュラムマネジメントハンドブック』ぎょうせい、2016年、序文）。これは興味深い論点ではあるが、教職課程の授業について述べる本稿では繁雑さを避けるために、原則として文科省が使用する「カリキュラム・マネジメント」の語で表記する。

[2] 「中学校学習指導要領」（2017年3月31日）。

[3] 同前掲書。

我流・文献紹介(10)

―東京都の私立高等学校―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

戦後の東京都における私立中学校の発足状況を書いたので、続いて私立高等学校の発足を書こう。

新制中学校実施の翌年、即ち1948年4月から新制高等学校の実施が決った。新制中学校のように実施が目前に迫ってからの決定でなく、たっぷり一年間の準備期間があったから概ねどの府県も順調に開校に漕ぎ着けた。その上、新制高等学校には母体があった。即ち旧中学校、高等女学校、実業学校の第四学年以上を再編成すればよく、校舎教室、教員、教科書等を多少組みかえればよかったのである。こうして1948年4月、旧中学校を移行した3,559校の公立私立の新制高等学校が誕生した。公立2,710校、私立849校である。私立849校のうち、256校、実に31.2%が東京に集中していた。東京都内の公私立学校数をみると公立123校に対して私立256校である。私立学校が公立を陵駕した府県はない。東京都の私立高等学校はまことに希有な存在である。因みに県立高校最多の新潟県(133校)の私立高校は9校、県立最少の宮崎県(16校)の私立高校は1校である(『文部省第76年報』による)。

男女共学について文部省は“共学が望ましいが、各校の判断にまかせる”とした。前身校である旧制中学校、高等女学校の伝統を考慮したのであろう。その結果、公立は男子校58、女子校39、共学公立23、男子部女子部3、私立は男子校104、女子校128、共学校20、男子部女子部4となった。男子部女子部制とは同一校内で男子部女子部に分け、校舎や教室を分離するものである。私立高校に女子校が多いのは戦前からの特徴である。

以上は数字上で明確にわかる特徴であるが、東京都の私立高校にはまた別の特徴があった。一つは大学附属または傘下の高等学校である。日本大学は戦前から5附属中学校を擁していたが、戦後、大型学校の解散命令により日大一中、二中、三中は日本大学と切り離されてそれぞれ日本第一学園、第二学園、第三学園の学校法人に独立し、日大一高、日大二高、日大三高になった。旧日大四中は日本大学高校(横浜市)として大学直轄校にしたが、その後、豊山高校、世田谷高校(現桜ヶ丘高校)、鶴ヶ丘高校、江古田高校などを直轄校にした。直轄外の日大一高、同二高等も進学その他教育経営上の便宜がはかられているから、これらは日本大学傘下の高校である。日大ほど巨大な附属高校、傘下高校は他にないが、東海大学、法政大学、明治大学、中央大学なども附属高校を擁している。このような大学傘下の高校が混在しているのが東京都私立高校の特徴である。

東京都の私立高校はこのように旧制大学や旧制高等学校の附属学校を前身として成立したものが多いが、附属学校の成り立ちの違いもある。学習院、武蔵、成蹊、成城の四大学は旧制七年制高等学校の高等科に当る三年制の課程が戦後昇格して大学になったので、尋常科に当る課程を附属高等学校にした。これに対し、早稲田大学は旧制大学と併立して新制大学を起し、旧制高等学院(大学予科)の校舎・教員ともに新制高等学院にしたのである。高等学院は旧制高等学校並の学科課程であったから、いわば降格である。駒沢大学高校、国学院も同様に大学予科を降格させて成立させた。専門学校の附属中学校を新制大学附属高校にした例は明治学院高校(旧明治学院専門学校)、青山学院高等部(旧青山学院専門学校)、日体荏原高校(旧日本体育専門学校)、工学院高校(旧工学院高等専門学校)等々である。

女子専門学校の附属高等女学校を新制大学附属高校にした例はさらに多い。伝統的な学校をあげれば共立女子高校・中学校(旧共立女子専門学校)、実践女子学園高校・中学校(旧実践女子女子専門学校)等があり、枚挙

にいとまがない。旧女子専門学校が昇格した女子大学には短期大学、女子高校、女子中学、附属小学校、幼稚園を擁する総合学園が目立つ。

以上の諸形態に重ねて、私立高校を特色づけるのは特定の宗教宗派が学校法人をつくって高等学校(多くの場合、高校と中学)を経営することである。仏教では天台宗の駒込高校、真言宗豊山派の宝仙学園高校、浄土宗の芝高校、淑徳学園高校、浄土真宗の武蔵野女子学院高校、千代田女学園高校、曹洞禅宗の駒沢大学高校、同女子高校、世田谷学園高校、青葉学園高校、日蓮宗の立正高校、東京立正高校、佼成学園高校等があった。キリスト教カトリックではマリア会の暁星高校、シャルトル聖パウロ会の白百合学園高校、メルセス会の光塩女子学院高校、サンモール会の雙葉高校、プロテスタントでは明治学院高校、青山学院高等部、聖学院高校、女子聖学院高校、恵泉女学園高校、自由学園高等科、桜美林高校、プロテスタント日本聖公会では立教女学院高校等があった。

東京都私立高校は普通科が多く、専門学科は少ないが、異色のものがある。その筆頭は岩倉高等学校であろう。明治30年創立の岩倉鉄道学校が起源である。明治の鉄道創設に尽力した岩倉具視の名をとったこの学校は爾来、国有鉄道の技術者、運営者を育ててきた。戦後の改革で、これを高等学校の普通科・機械科・運輸科に直したのである。これとは別に昭和鉄道高等学校もある。昭和12年、松前重義が創立した電気通信の東海工業学校は、戦後の学制改革で東海電波高校(現東海大学高輪台高校)になった。当時最先端の技術学校である。世田谷区の元陸軍獣医学校跡に日本装蹄畜産高等学校が開校した。装蹄畜産農業科と食物科を置く後の駒場学園高校である。戦時中、山下汽船の山下亀三郎が陸海軍人の子弟のために財団法人山水育英会をつくり、国立市に山水中学校、調布市に山水高等女学校をたてた。敗戦により山水育英会は解散し中学校、高等女学校の管理は東京教育大学に移管された。山水育英会は学校法人桐朋学園となり、国立市の

中学校は桐朋高校に、調布市の高等女学校は桐朋女子高校になった。桐朋女子高校には普通科のほかに男女共学の音楽科を併設した。後には国立音楽大学附属の音楽高校その他に音楽高校ができるが、戦後、音楽を専門学科とする高校の先駆けであった。

以上、私立大学の傘下、系列による高校群、また宗教各派所属による高校群の重層組織と専門学科の多様性を述べた。これらはもとより全国的なものであるが、私立高校が密集した東京都はそれが際立っている。東京都私立中学高校協会が如何にまとまりにくかったか。それは68年の「高等学校教育課程改訂に関する要望書」作成に当って私立高校の統一見解を見出すことの困難さに如実に現われたのである。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

「菊地城司／ゲリラ戦法をめざす教育社会学」日本教育社会学会編『教育社会学の20人　オーラル・ヒストリーでたどる日本の教育社会学』（2018年、167～181頁）を読んでみました。菊地先生によれば、海後先生らのもと共同で行った森有礼や井上毅といった歴史研究から始まった研究キャリアでしたが、「歴史研究は老人になってからでもできると不遜にも考えて多くの課題を老後に残して、長い間中断していましたが、最近わかったことは、時間はふんだんにあるとしても、歴史研究ができるわけではないということでした。…歴史研究にこだわりながら、そこを拠点に視野を拡げていくことも不可能ではなかったかもしれない」と吐露されています。さらに興味深く菊地先生は、「学際的な学問というのは本質的に『ゲリラ』的学問であり、『ゲリラ』として活路を開く以外の途は存在しないと考えます。…今や、教育学の中心となったといって自己満足して『ゲリラ』であることをやめてしまえば、やがて再び斜陽学問に回帰してしまいます。学際的な学問にとって研究テーマは専門領域によって与えられるのではなく、解こうとする問題によって決まる。…たえず守備範囲を拡大しなくてはならないのです。社会構造のさまざまな分野、経済、経営、外交、政治・行政、軍事、技術…など制度的秩序と教育との間に存在する『隙間』を埋めて『隠れた関連』を見出していくことこそ『ゲリラ』に最もふさわしい任務ですし、幸いにしてこの『隙間』はほとんど無限に存在して尽きることはありません」と述べ、教育社会学研究の在り方を介して、我々に学際的な研究の方法論を提起しているとまさにいえるでしょう。（谷本）

神辺靖光同人の「我流・文献紹介」は、神辺氏自身の戦後教育をめぐる体験とその背景に関する文献紹介がぴったり同調していて、やはり面白い。特に第47号の「我流・文献紹介（8）　ー体験からみた新制中学校の実態ー」は、神辺学級の様子が目に浮かぶようだ。わたしも、例えば1980年代に経験した寮生活のことと史料や文献と組み合わせて、楽しく読める文章を書けたら楽しいだろうな、と思った。（冨岡）

会員消息

女優の赤木春恵さんが94歳で亡くなられたニュースを聞き、昭和という時代の女優さん、お母さん役がまた居なくなってしまい、少し残念に感じました。さて、賢人こと“グランマ”と、皆から親しみをもって尊敬される人物が優しく主人公らの成長を導くアニメ作品“ARIA”(The ANIMATION、2005年)の第9話「その星のような妖精は…」を、またあらためて視聴しました。作品の基本ストーリーとしては、未来の火星を人工的な水の惑星アクアとし、そのなかの観光都市ネオ・ヴェネツィア(地球のヴェネツィアを模倣)で、観光案内人として一人前の女性ゴンドラ漕ぎ(ウンディーネ)を目指す少女らの成長過程が描かれています。第9話では、練習に日々励みながらもなんだか行き詰まりを感じた主人公らが、今は隠遁中で皆から“グランマ”と親しまれ、ウンディーネ界を30年以上も牽引した「伝説の大妖精」と称される大先輩のもとを訪れ、今の自分らに足りないものはなにかという助言をもとめます。とくに今元気になりたいかたにとっては、必見の伝説的な神回です。なんでも愉しむことが第一で、辛いことや哀しいことはより人生を愉しむための隠し味と思ってねって、日々を我われが今しっかり生きていることはとても素敵なことなのよ…と、さり気なく彼女らにグランマは伝えます。(谷本)

2019年が始まり、今年は学会誌への投稿などにも力を尽くしたいと存じます。皆さま、ご指導くださいますよう何卒よろしくお願い申し上げます。(末松)

年末・年始は時間の進む速度がかえって増してしまったようです。それだけやることがあるのは有り難いことです。現在の懸案をいくつかメモがわりに挙げてみます。1)勤務先の教職課程の新課程へのスムーズな実施(本号の記事もこれに関係しています)、2)木下広次研究を含む教育史研究の進展、3)松本の旧制高等学校記念館夏期教育セミナーの充実、4)2025年に創立百周年を迎える近畿大学の校史関係史資料の収集・整理・活用、5)教育史研究上の急務ともなっている京都大学吉田寮の保存・活用をめぐる問題、6)趣味でやっている合唱の充実(2019年2月17日に京都シティフィル合唱団の演奏会が京都コンサートホールであり、テノールの一員として出演します。曲目はメンデルスゾーンの「パウロ」、開演は14時30分です。詳細は、<http://cityphil.com/>。もしよろしければ格安でチケットをお送りしますのでご一報ください)。(冨岡)

1月17日、野間教育研究所へ行ってきました。講談社が運営する公益財団法人で、教育関係の研究をはじめ、専門図書館として70年近くも活動していらっしゃるのですね。恥ずかしながら、私はこの年になるまで、このような研究所があることも、特に学校沿革史誌は高等教育機関を中心に約8400冊ものコレクションがあることも知りませんでした。

現在、明治後期の女学校、高等女学校、専門学校、大学への発展を見据えて、女子教育史を書き始めています。そのための資料集めに、神辺先生からご教示いただき行ってまいりました。

新しく、きれいな施設で、閲覧席は12席ほどですが、長いテーブルが置かれていて資料を広げることができます。17日は午前10時から午後3時過ぎまで、利用者は私一人でしたので、大きな窓から見える護国寺の脇門や緑の木立、ずらりと並んだ京都大学や九州大学などの沿革史誌の書棚を眺めながらサンドイッチを食べるなど、ぜいたくなひとときを独り占めしてきました。

コピーも（1枚10円）自分ででき、帰る時に学芸員の方に数えていただき、支払います。

こんなに充実した施設を無料で利用させていただけるなんて、無所属の私にはとてもありがたいことでした。講談社もなかなかやるなあと感心した次第です。

（長本）

現在、看護師を養成する専門学校で「教育学」の集中授業を行っています。受講生の年齢層は幅広く、また実際の子育てを経験した方が多くいらっしゃいます。大学の(若い)学生相手とは違った緊張感があります。教科書でかじった知識など、ここではすぐに見破られてしまいます。さまざまな事情を抱えながら看護・医療職を目ざす人たちに、どのような授業ができるのかを考えています。

(山本　剛)